

連載

実験的教育論 [最終回]

教えることは、たった
一つしかない

まちだ そうほう

広島大学大学院教授 町田宗鳳

子どもを信じるということ

一年間にわたって続けてきた本連載「実験的教育論」も、今月号をもって最終回となる。留学時代に、ポストンの日本人補習校で代用教員として小学生を短期間教えたことはあるが、あとは大学教師としての経験しかない私が、『児童心理』のような教育専門誌に連載の機会が与えられたことは、たいへん光栄なことながら、どこか後ろめたい気もしないではなかった。

ただ、アメリカ、シンガポール、日本という三つの異なる教育文化をもつ国々で、長く教壇に立ってきた体験から、つねにわが国の教育の在り方には強い関心を抱いてきた。

また海外に出て、諸外国の社会状況を目の当たりにする機会が多い私にとって、教育がその国の最も本質的な原動力となるという確信は、揺らぎがないものである。だから、現場の先生方とスクラムを組みながら、日本の学校教育を少しでも改善していきたいという気持ちは、今も変わらない。

そして、鼻持ちならぬ自慢話と受け取られることを覚悟して書くなら、私は二人の息子をアメリカのアイビー

リーグに送り込んだ父親でもある。長男はブラウン大学で生物学を専攻し、医者を目指している。次男はコーネル大学で建築学を専攻し、建築家となることを夢見ている。おまけに二人ともアメリカ政府と大学から多大な奨学金を受けてくれているため、薄給の私にとって、これほど有り難いことはない。

二人とも塾に通ったこともなければ、家庭教師についてたこともない。高校は私の仕事の関係で、シンガポールと東京のインターナショナル・スクールに入ったが、あとはアメリカの地方都市にある、ごく平均的な公立学校に通っていただけである。それで、難関中の難関とされる名門大学にストレートに入ってくれたのだから、わが息子ながら、あっぱれと言わざるを得ない。

もちろん、アイビリーグ以外にも優秀な大学はあまたあるが、全米におおよそ五千校ある大学のなかの八校で学ぶことは、アメリカ社会では、一種のステータス・シンボルとなる。したがって、一般的なアメリカ人の親にとっても、自分の子どもたちを揃ってアイビリーグに入学させることは夢のまた夢に近く、よほどの好条件が整わないと実現しないとされている。

だから、私が理想的な教育的父親だったということでは

はなく、事実はいま一つその反対である。私は教育的にも人格的にも、子どもたちにとって、つねに反面教師であり続けたし、今もそうである。彼らが親父の愚かさ加減に呆れたことはあっても、学者である父親の存在に、なんらかの圧迫感を覚えたことは、まずないだろう。

教師と宗教家と警官の子息子女には、非行に走る子が多いとされるが、それは模範的市民であろうとする親の形式的反逆なのである。それによって、親の建前と子の本音がちょうどバランスがとれるわけである。家庭というのは、そういうものである。

私は教師でもあり、宗教家でもあるので、子どもたちは二重のリスクを背負ったことになるが、まっとうに育ってくれている。そういう点では、わが子は建前よりも本音の部分を多くむき出しに生きてきた愚かな父としての私に感謝しなくてはいけない、という変な自負が私にはある。

私も妻も息子たちに向かって、ただの一度も「勉強しなさい」と言ったことはない。代わりに私が頻繁に口にした言葉は、「早く外に行って、遊んできなさい」であった。第一、子どもたちが宿題に行き詰まって、私に聞

いてきても、「お父さんは自分の勉強だけでも、英語にうんざりしてるんだから、お前たちの教科書まで読みたくない。自分で考えなさい」としか言わないものだから、そのうち私に聞かずに、母親に聞くようになった。英語の苦手な家内が辞書を引きながら答えていたから、偉いものである。

つまり、何を言いたいかといえ、私のようないい加減な父親でも、子どもはちゃんと育つということである。それをもう少し演繹して説明するならば、子どもがどのような学校に進学するかは、子どもに任せよ、ということである。進学する学校次第で、子どもがこれから歩む人生の幸不幸が決まるわけではないのだから、親はそんなことにムキになってはいけないのだ。

それよりも重要なことは、親が子どもを信頼することだ。たとえば、子どもが二流、三流と風評が立つような学校に進んだとしても、そのことによって、子どもの価値と可能性をつゆも疑ってはならない。たまたま試験勉強に向いていなかっただけであり、わが子の才能はまた別なところにあるのだと、そのぶん確信を深めなくてはならない。

もう一度、親バカ論に戻るなら、冷静沈着な次男とは

対照的に、気分屋で和太鼓が大好きな長男が、突然、「大学を辞めて、和太鼓でメシを喰っていきたい」というメールを送ってきたときも、私は「お父さんは、若いときに大学中退して苦勞したから、留年してもいいけど、中退はあまり勧めない。だけど、最終的には自分で考えて、好きなようにやればよい」という返信メールを送っただけである。どのような道を進もうと、私の彼に対する信頼は変わらないからだ。

何を教えるべきか

かといって、親は子どもを信じさせれば、放っておいていいと言っているわけではない。教えるべきことが一つある。それは何か。

何事にも心を込めることである。この教育は早ければ早いほどよい。遊ぶときは、一生懸命遊ぶ。できることなら屋外で日が暮れるまで遊ぶ。何かに「没頭する」体験を重ねることが大切なのである。それが子どもの集中力と感性を育てることになるからだ。

私は子どもたちを誘って、雪の多い東海岸の冬は、毎日のようにスノーボードで急坂を滑り降りて戯れていた。ハワイの溪谷では、ターザンのように長い蔦にしが

みついて、飽きることなく何度も急流に飛び込んだ。アラスカでは、ニメートルもある熊との遭遇を避けるため、フライパンを叩きながら、まったく道のない山を登った。私は子どもの勉強を見たことはなくとも、一緒に遊んだ記憶ならいっぱいある。

私の家では、子どもたちが幼いときに買い与えた玩具は、「レゴ」だけであった。単に方形をしたプラスチックの積み木であるが、その組み合わせ次第では、千変万化の形象が作れる。子どもの想像力を養う上で、いい玩具だと思っただからだ。

しかし、そこで大事なことは、どれだけ玩具をひっくり返しても、遊んだ後は、それをキッチンと片付けることである。そんな当たり前のことすら、躰けていない親が多いのではなからうか。モノを大切にすることを幼いうちに植えつけておくか、おかないかで、その子の人生の意味は大きく変わってくる。

昨今、ゴミを平気でポイ捨てするような人間がやたらと多いことに、しばしば心が痛むが、彼らはモノを大切にすることを親からも教師からも学ぶ機会をもたなかった哀れな人間たちである。そういう人たちは、やがて社会からポイ捨てされるような人生を歩まなくてはならない

だろう。

食事を頂くときも、一つひとつ心を込めて頂く。せめて食事の際には、テレビは消すべきだ。そして、一つひとつの食べ物を深く味わいながら、食材や食事を作ってくれた人への感謝をこめて頂く。レトルト食品やファーストフードばかりを子どもに与えることの弊害が指摘されて久しいが、食品の内容もさりながら、食べ物をもどように口に運び、どのように咀嚼するか、そのへんのことがおおざりになっていないだろうか。そういうことを子どもに教え、育てていくことを、真に教育というのである。

大量消費経済というのは、罪な経済システムである。企業の売り上げは増えるが、じつは薄利多売で、あまり儲からない。大量生産のために、天然資源が乱開発され、地球環境が悪化の一途をたどる。その製品を次々と買わされる消費者は、働けども働けども豊かになった実感がない。共産主義も社会主義も行き倒れになったが、つぎは資本主義も同じ運命をたどるだろう。

だからこそ自分たちの子どもは、できるだけ大量消費経済の悪弊から守ってやらなくてはならない。では、何からすればよいか。まず、子どもたちに古着を着せれば

よいのである。兄妹がいれば、下の子はお下がりで十分である。近所のバザールやリサイクルショップで買って来た古着でもいい。

子どもは、あつという間に大きくなる。新品を着せる理由はない。なのに、幼い子に高級ブランド服を着せるような親は、失礼ながらバカとしかいえない。その子が長じてから、舐めなければいけない苦労の種をわざわざ蒔いているようなものである。

ただ、古着はそのまま着せるのではなく、親がそれなりの手を入れてやり、決して粗末に見えないようにするところが、愛情というものだ。自慢ではないが、わが子たちは中学校に上がるぐらゐまで、一着とも新品の服を着たことがなかった。

アメリカで苦学生だった私に経済力がなかっただけのことであるが、それが幸いした。高級住宅街のリサイクルショップで古着を買い、家内がそれに手を加えて着せてくれたおかげで、今も手持ちの服を大切に着ている。しかも男の子にしては、服装のセンスがけっこう磨かれたようである。

大学生ぐらいになると、入学祝いか何か知らないが、やたらと高級車を乗り回す連中がいる。自分で稼いだ金

で買ったなら文句は言わないが、親に買ってもらったとしたら、その学生の将来は暗い。高級車に乗りたければ、せめて事業にでも成功してからにしてほしい。それが、若者らしい夢というものである。

勉強に忙しいはずなのに、どうしてもクルマに乗りたければ、自分でポンコツを買えばよい。そして故障するたびに、油だらけになって、自分の手で修理するのである。それでこそクルマというモノに対する深い愛情が湧いてくる。

クルマのメカもわからない人間にかぎって、次々と目新しいクルマに乗り換える。そうして、やがてはモノとヒトの「心」がわからない浅薄な人間となっていくわけだ。

著名な外国人が「もったいない」という言葉を誰かの受け売りで使っただけで、大騒ぎしなくてはならないほど、現代日本人は浪費癖が身についてしまっているのである。亡国の憂いというものを、そういうところにこそ、私は感じてしまう。

今を楽しむ

「勉強しなさい」と言って、子どもを上級の学校に進

学させるのは、子どものことを思っているようで、じつは多分に親のわがままが先行している。子どもたちが、いい学校や、いい会社に行ってくれば、世間に鼻が高い、老後も安泰である、などという下心がないと言い切れるだろうか。

子の幸せを親がつくることはできない。真に子の幸せを願うなら、自分がまず幸せに生きてみせるほかない。その姿を見て、子もまた、幸せに生きる道を学んでいくのである。

親が高学歴や高収入であっても、ストレスと愚痴に満ちた生活をしていけば、子は高学歴や高収入を得ることの意味を納得しないまま、親の言われるままに、上昇志向を身に付けていくことになる。そこに空回り人生の起点がある。

極論すれば、もう将来のことは、どうでもいい。「今」を楽しむばいなのだ。それを利那主義とか快樂主義とか、皮相な知識で批判するなかれ。今、家族と共に寝起きし、共に食することの喜びを感じることなく、未来の幸福はありえない。現実には、明日という日に交通事故か地震で死ぬ可能性は、低くないのである。進学とか就職とかいって、まだ来てもいない未来を追いかけている暇

はない。

だから、「今」という時間を大切にし、「今」という瞬間を精一杯に楽しむこと以外に、親や教育者が子どもに教え伝えることは何もない。たとえ、何かの目標に向かって精進努力するがゆえに、辛酸を舐める日々を送っているようにも、「今」という瞬間を見失ってはならない。

教育というのは、畢竟、「今」を生きることである。「今」を生きていない親や教師が、いったい若い世代に何を伝え得るといえるのだろうか。

「実験的教育論」と題する本連載を通じて、ずいぶん暴言めいた提案をしてきたが、それがなぜかといえば、「過去」とか「前例」とかいう虚妄の世界に閉じこもって、「今」を生きようとしないう教育者が多すぎるからだ。日本の未来は、教育にあり。教育の未来は、「今」にある。そんな単純な結論を聞かされるために、生真面目にも私のエッセイを読み続けて下さった読者が一人でもおられたなら、私はその方に平伏低頭して感謝したい。